

法政大学史学会々報 第2号

法政大学, 史学会

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学史学会々報 / 法政大学史学会々報

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

20

(発行年 / Year)

1951-03-31

法政大學

史學會報

(第 2 號)



(1 9 5 1)

法政大學史學會發行

公園講演会講演要旨

昭和二五年一月一八日（土曜日）午後一時半から新しい学生ホールに於て第二回公園講演会を開催した。秋雨の降る寒い日であつたにも拘らず好學の士二〇〇余名が参集し、教授各位の深い御研究の一端を熱心に拜聴、終つたのは午後六時頃であつたが、中座する者もなく眞鍮そのものゝ姿に心打られた。先づ藤井会長から両会の挨拶があつた。

「終戦後我が國民は經濟的窮乏と共に精神的にも空虚になつた。私がドイツに留学してゐたのは丁度第一次世界大戦の直後であつた。マルクは一兆分の一にも下落した時であつた。私はフーリンケ村の図書館に通つてゐたが、ドイツの青年達多數がドイツ史の勉強をしてゐた。如何にも希望に満ちて、衆しそ々に……ドイツ民族の過去の歴史のみが彼等の楽しみであつたのだ。」

私たちもドイツの例をひくまでもなく終戦後の混乱の中でも、日本民族の歩んできた過去を正しく認識し科学する事に限りない熱しさを感ずる。法政大学史学会主催第二回公園講演会を開催致した処、かくも多数の同学の諸君が相集うことを得たことは実にうれしく有難く思う。云々……

と。大體以上のような意味の御挨拶であつた。

次で

唐末五代の武人政治

周藤 吉之教授

中世村落における神座の座・丸山 忠綱教授
西洋中世における僧院の生活とその文化活動

竹内 直良教授

の順で講演された。最後の竹内教授の講演は、史学科御自慢の幻燈を使用、フィルムによつて西洋中世の僧院の生活を見る事ができた。講演の要旨は次の通りであつた。

唐末五代の武人政治

周藤 吉之

唐末五代は中國史上画期的な時代であるが、政治史の上より見れば、武人即ち節度使の政治体制であつた。節度使体制は唐の中頃以後各地に成立し、唐初の律令体制を内部より切り崩していつて、遂に唐を滅ぼし、五代に至つて全国的に確立したが、やがてこれは宋の成立と共に解体させられて、官僚による政治体制ができ上つた。然し宋の官僚政治も唐末五代の節度使体制の中から発展したものであつた。即ち節度使体制は文官と武官より構成され、勿論武官が重んぜられていたが、文官もその幕僚となつて、民政、財政等を司り、軍機にも参画して、節度使勢力の消長に重大な関連を

もつていた。従つてその節度使が天子になると、かれらは宰相や財政の長官となつたのである。そこで宋が成立して節度使体制が解体され、武人が抑えられるとこれらの文官即ち官僚が勢力を得てきて、遂に官僚による政治体制ができ上つたのである。

中世村落における神社の座

丸山 忠綱

〔「中世村落」と限定したが、實際上においては神社の座即ち宮座については初めての人々も多かるべきを慮つて、一般宮座の尸史のあらましを述べた。〕

宮座は概括的に申すと、その神社の祭儀及び経営に關し、他の信徒、氏子に比較して特別な権限を有する氏子の組合と言ふべきもので、そのやうな組織は大体において東北地方の北半を除くと全国的に見られる。従つて民俗現象としては種々様々な様相が見られ、その名称の如きも多様である。宮座の起源は恐らく、一応祖先神と思念される氏神の血縁的紐帶觀念がうまれた頃、その結合を鞏固ならしめんとする所から生れたもので、大体平安時代の後期頃から現はれるに至つたのであらう。宮座の内部構造は階級的血縁的關係、地縁的關係、年齢階級的關係の三方面から分析して行く

ことが出来る。これらの三要素が中世以降の時勢の變遷に伴つて、社会現象と成つて現れて来る。佛教寺院との關係も深くなつて所謂神佛習合の形を示す。又宮座が中核となつて村落の結合を固くするのが普通であるが、中には却つて座外の者との対立を生んで分裂を促す場合も生れる。かうした宮座制度を維持するのは中世的な家格の觀念が根本となると考へられる。それは更に經濟的な裏づけがなければならぬので、時の経過の裡に自らメンバーが代つて了ふことも起きたが、概しては明治維新の際に大きく崩壊する所であつた。戰政的には社有財産と座有財産の區別をつけかねる所あるも、後者としては座田と共有山林が主で、憑子などの經濟活動も行つたことあり、往昔の榮華をかずかず今日に伝へてゐる。要するに宮座は、日本農村社会の内部を探る重要な鍵の一つと言ふべきである。

西洋中世における僧院の

生活とその文化活動

竹内 直良

西洋中世におけるキリスト教会を左右し、その裏面にあつて隠然たる威力を持つて居たのは修道院であつた。

修道思想の根本をなす禁慾主義は聖書から生れたものではなく、むしろヘレニズム文化圈に流れ込んだヒンズー教の影響を多分にうけて居る様に考へられる。そうしてその起源はエジプト、ナイル河流域地帯に見られ、これより東方に広まつたが、六世紀ベネディクトがイタリヤに僧院を建て戒律を作つてからその生活様式が一変し、さきの隱遁的性格は薄らいで實社会に深い關係を持つてくる。その後クルニー派、シテルシアン派などベネディクト派の正統後継團體が現れるがすべて伝道事業、文化事業、例へば寫本による古典の保存、年代記、史書の編纂、民間の子弟教育などに活躍する。

僧院の内部には回廊を中心として、聖堂、寢室、食堂、庫裡、浴場、便所、教室、図書館、寫字室などがあり、その配置は大体一定してゐる。周囲には自給自足の爲の畑地、果樹園、魚池、牧場、諸種工場などが敷在し、一王國の如く、後世にはその郭内で市場が開かれたこともある。これらは近世に入つて概ね崩壊し、又社会的勢力も全く消え去つてしまつたけれども、文化活動の担当者としての中世僧院の地位は極めて大きい。

例会記事

(「辻善之助博士」時代思想を超越せるもの)

昭和二五年度第三回例会は、二五年一〇月二八日午後五時半から、国史学界の耆宿学士院会員東大名譽教授辻善之助博士に御來講を請ふて、本学内教室に開催された。先づ会長から辻博士の重厚なる学風を讃へて紹介し、次いで博士は「時代思想を超越せるもの」と題して約一時四半に亘り、深遠なる学識を披露せられた。

御講演の内容は、日本中世武士団族にその指導的地位にあつた平清盛、源賴朝等が、當時の公卿衆僧侶神官等の間に溢れてゐた旧來の思想、伝統的習俗に、捕はれることなく、超然として所信に邁進行動したこと、が、新時代を作るに与つて力があつたことを、清盛が神木動坐に警かず、一切經石を徑島に泥めて人柱に代へたこと、さては賴朝の地頭取設置など、その他多くの史実を挙げて、縦横に批判評論せられ、又大覚寺統持明院統に各々保守的傾向と自由的傾向が流れていたことに注意を惹起せられて、詳細に花園院辰記の御記事を紹介せられ、徹底の程を説かれた。

当座參集の教員学生約七〇名。

史蹟調査(金沢文庫)報告

(永濱 先義)

昭和二五年一月二三日(木曜日)勤務感謝の日に第二回目の史蹟調査として金沢文庫に行くことになった。当日は晴と曇つていたが暖かくて見学にはもつてこいの日和であつた。藤井会長を始め竹内、岡野、丸山教授並びに学生二八名、その他会員の特別参加が二名あつた。

午前九時半品川駅に集合。湘南線金沢文庫駅で下車。駅前だけ一寸賑やかだが国道を横切ると田舎町のほこりっぽい狭い道になる。一〇〇〇米も行くと左側に称名寺がある。山門に入る。左右に大きな池があつて紅葉した樹木が生い茂り幽邃な所である。正面が金堂、右隣りに釈迦堂がある。称名寺は金沢文庫と同じく、北條実時がその別荘内に創建したのであるが、現在の建物は江戸期に改造されたものである。然し実時の深い注意によつて此の幽静な場所に建てられた為一度も水火の災に罹つていないので本堂内には鎌倉期の製作にかゝる佛具が沢山残つてゐる由。金堂の手前右側に鐘樓がある。金沢八景の一つ「称名暖鐘」というのは此の鐘の音が響き渡る静かな晩のことださうだ。

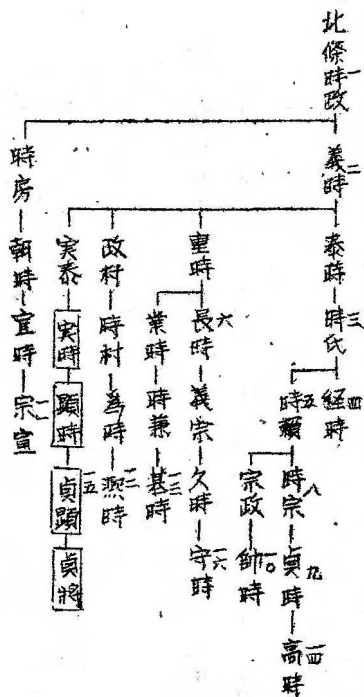
本堂の左の一丈小高い丘の上、樹木に囲まれた外形は日本風、防火の身、コンクリート石造洋風併用の瀟

洒な二階建ての建物がある。これが鎌倉時代の書籍や古文書等を蔵してゐる保存図書館金沢文庫である。二階の会議室で休憩させて戴く。

熊原館長が来られたので藤井会長が挨拶された。続いて熊原館長から金沢文庫及び称名寺の由來、所蔵されてゐる書籍や古文書、それらの史学上の意義等について説明があつた。

金沢文庫は北條実時が建治元年(一二七五年)に創立したものである。

北條氏略系



実時は若い頃から文武両道に優れ、特に心を武家の政道に傾けて居り、建長四年(一二五二年)に清原教隆(常春)と一緒に幕府の引付衆に挙げられてからは主として清原流の字阿をした。又支那から多くの宋版

(5)

の本を取寄せたり珍らしい和漢の本を書写したりして常に寸陰を惜んで勉強した武將であつた。『令義解』の五巻に実時が非常に好字の人であつたといふことが書いてある。実時は父実泰の代から六瀬^{ロウセ}庄の領主であつたがその庄内で一番景勝の土地である金沢を選んだ。

此処に別荘を構えて、邸内に鎮守社や寺院を建てた。その寺院が今の、称名寺で鎮守社は多分今の寺前の八幡社であろうと考へられている。その御神体僧形八幡や龜山天皇の御宸翰と伝えられている八幡宮の額は今文庫の二階に安置されてあるので、後でよく御覽下さい。称名寺は実時の寺号である。実時は建治元年（一二七六年）に病氣のためにこの金沢の別荘に隠居したが同時に此処に独立の文庫を建て、今迄永く蓄えていた多くの書籍を納れ、他人にも読ませ、自分でも讀んで楽しんでゐた。之が金沢文庫の起りである。

その文庫の位置は、邸宅の西へ低い山を隔てた所で、その向にあるトンネルは当時文庫へ往復のために造られたものである。実時は鎌倉に居る時二度も火事にあつた。七年かゝつて写書した本を焼いてしまつたので又穿すと書いてあるので（一寸とその本の名は忘れた）火事に会うことのないように邸宅と山を隔て、文庫を置いたものと思われる。これによつても彼が如何に好字の人であり、努力の人であつたかがはれる。彼が建治二年（一二七六年）一〇月二三日五三歳で卒

去した後その子顕時、孫貞顕、曾孫貞時と四代、何れも遺志をついで文庫利用の便を図つたので寺院の隆盛と共に四方から多くの好字の士が集つて来て称名寺の一部は遂に金沢の字校とまで呼ばれる様になつた。

元弘三年（一一三三年）北條一族の滅亡により自然文庫の建物も朽損して、その蔵書は全て称名寺で保管されることになつた。長い間には段々散佚して多くの珍籍を失ふことになつたが、それでも実時は圖書を儲蔵するために深い注意を払つて、金沢の様な幽静な土地を選んで、文庫を建てたので六七〇年余の長年月の間一度も水火の災に逢はずに、今日尚二萬巻余の古書四千余通の古文書が保存されて、我が国文庫上に大なる貢獻をして居る。是偏に実時の賜である。

現在の金沢文庫は神奈川県が金沢文庫や称名寺に伝はつた珍籍什宝類を保管して、その一部を一般公衆の觀覽に供へてゐるのであるが昭和四年に出来た建物である。

大要以上のような説明があり、質疑応答後、古書、古文書や佛像その他の宝物を見学、館長や教授の名先生方から御指導を受けて実に有意義であつた。中には一生懸命ノートをとつてゐる学生もあつた。

尚、元金沢文庫に通じていたと云うトンネルを見、北條顯時、貞顯の墓に詣て裏山に登つた。山頂の觀音堂からの眺望は實によかつた。紅葉した木々と常緑樹

との調和のとれた山、静かな海。此処から駅までぶらぶら歩いて、午後四時半駅で解散した。

◆金澤文庫に保存されている主な古書◆

- 本朝文粹 卷一 紙本 墨書 鎌倉期 一冊
- 今鏡(新撰)後篇 現存八葉の内 紙本、墨書 鎌倉期 一葉
- 吾妻鏡後篇 紙本、墨書 鎌倉期 一軸
- 仲文章要文 紙本、墨書 鎌倉期 紙背消息 一冊
- 片假名草和歌集 紙本、墨書 鎌倉期 紙背消書 一軸
- 手習覚往来 紙背消書 墨書 鎌倉期 一冊
- 歌五十首和歌 紙背消書 墨書 鎌倉期 一軸
- 和歌歌草 紙背消書 墨書 鎌倉期 一軸
- 連歌歌草 紙背消書 墨書 鎌倉期 元弘三年正月元弘二年
- 鈔曆 紙背消書、墨書 延慶三年 一軸
- 版曆 紙背消書 元弘二年の奥書あり 一軸
- 明備願文集 紙本 美濃判 墨書 鎌倉期(国定) 一冊
- 南史列傳第三十八 宋本 廿三葉
- 文選集註第六十二 現存十九軸の内 紙本 墨書 平安朝(国定) 一軸
- 世説新語景本 宋本 一冊
- 大藏益會玉篇殘簡 宋本 六葉
- 春秋集傳第三 宋本 佚書 一葉
- 元氏長安集殘簡 宋本 一葉
- 又苑英華殘簡 宋本 一葉
- 宋版曆殘簡 嘉定十一年宋本 佚書 一葉
- 鎌倉期鈔本 一軸

會員隨想

○隨想(海の厂史への魅力)

藤井甚太郎

私が厂史の専門書を、生れて初めて讀んだのは、マハン大佐の海上權力史論で、時は確かな明治三五年、郷里福岡市の出雲大社分祠私立図書館にて、であつた。勿論譯本であつたが、よく判らなかつたことを告白して置く。それから吉田東伍先生の瀬戸内海上權力史論一名「海り厂史」を讀んだ。これは余經先生の史眼に感心した。以末海の厂史に興味を覺へてゐたが、近世史の研究に多くの時間を割いてゐたので、たゞポツポツ研究する位であつた。近頃は海上史や漁村史の研究が大分盛んとなつた。それには自分の恩人波沢清洲先生の嫡孫元日本銀行総裁波沢敬三氏の波沢漁村史研究所の功績が多い。又、住田正一氏の海上史料の蒐集と研究、羽原又吉博士の漁村の社会経済史的研究、東北大の吉田良一教授の海運史研究、さては水産庁の漁村史料調査整備など、盛んに成績を挙げてゐられる。私も今取を盗んで「玄海洋上海上權力史論」を編してみます。

思ひついたまゝ、

竹内 直良

我々が現に持つて居る智識は一体どれが自分自身のもので、どれが他人からの教へたものか、小学教時代から、いまでもつと古く、凡そ知能が付いてから我々は他人の智識をそのまゝに受け入れ、それを自分のものとして居る。結局自分の學問とが思想とかいうものは何か、すべて他人から得たものではないかと一応疑つて見たくなる。けれども當然として自分の學問、自分の思想というものはある筈である。

然らば自分のものと、他人の受け賣りとの区別はといふに、それは結局消滅の程度であると思ふ。元來は他人のもので、それが完全に自己に吸収され自己といふ有機体の一部となつた場合は明かに自分自身のものである。

ところが現在學問の世界において、智識が自分の精神と結びつき又は体験を通つたものではなく、宛も相手の如くネクマの如く或が個々身に付けて居るに過ぎないといふ程度のもので極めて多い。教へて流行の自主性などといふ固著しい言葉を聞ひずとも下腹から出た學問はさほど多くはない様に思ふ。

では自分のものと消化する為の方法はといふに、それは唯良書を熟読深考することである。書物はけつし

て自分の論文をまとめる際にその一部を勝手に引用する材料だけではない筈である。史学者は勿論博識を要する。けれども更に重要なことは身につく様に、思想の種となる様に良書を（重要史料を）克明に読破することである。——それが度重つて博學となる。——

従つて徒らに目うつりすることは弊物である。小泉八雲が読書論の中に「新刊書が出たと聞く度毎に古書を讀め。 (*Whenever you find of a new book being published, read an old one.*)」と云つて居ることを諸君におすゝめしたいと思ふ。（昭二七、三三記）

随 想

岡 藤 吉 之

法政大學史學科ができて、今度旧制第二回の卒業生と新制第一回の卒業生を出したことは、私の生涯にとつても誠に思出深いことである。私は大學卒業後研究の生活ばかりして、教師の経験がなく、昭和二二年四月、始めて法政大學高等師範部の教師となつて、しばらくの間、今度新制を卒業した諸君に東洋史を教へ、六月に旧制の學部ができて、旧制第一回の卒業生諸君に東洋史概説を講義し、以後引續いて今度卒業した旧制第二回や新制第一回の諸君につまらない講義を

やり、今思えば誠に恥ずかしい處がある。然しこれらの諸君は私が始めて教えた人々であり、私にとつては最も懐かしい人々である。殊にそれらの中にはこの法政大学史学会の成立について幾度か話し合つて議論した人々もあり、個人的にも色々親しく話し合つてゐる人々もある。そこで私としては、これらの卒業生諸君がこの法政大学史学会を中心として、今後益々お互に緊密に連絡をとつて、研究を励まし合つて、この会を一層発展させていかれることを心からお願する次第である。

一つの感想

岡野 雄

誰が見ても面白い論文もあれば、誰が見ても面白くない論文もある。また、いつも面白い論文を書く人もあれば、いつも面白くない論文を書く人もある。この「面白くない」というのは、いったい何であらうか？ それは論文を読む人自身が、自分の判断において、何か「価値」があると認めることだつたと思う。そしてその価値とは、人同様の本体、すなわち人間とはそもそもいかなるものか、またいかにありねばならぬかを究明する上に、何か役に立つということにほかならない。

こゝに、厂史家の価値判断なるものが同題となる。厂史の論文は、もちろん一つの創作である。しかしいかに創作力があつても、批判力がなければ何もならない。この批判力なるものが、つまり価値の判断力であり、平たくいへば史観でもある。私たちが厂史家にとつて最も大切なのは、まず「何が価値があるか」を認識することである。この肝心な点に気がつかないで、やたらに論文を書きまくる人は、ちやうど行先がわからないのに、急行列車で右往左往するやうなものだ。行く先がはつきりしていれば、たとえテクテク歩いて、一歩一歩と目的地に近づいて行けるだろう。価値判断の力を養うには、まず眼界を広くして、厂史学以外の学問にも興味を持つこと、立派な芸術作品に親しむこと、そして人生をまともに体験することから始めなければならぬ。

吉田松陰と河上肇

丸山 忠綱

最近、奈良本辰也氏の「吉田松陰」を読んだ。手際よくまとめたものだ。読み易いが、松陰其人については別に新しい見解と言ふやうなものもつかない。これはなかつた。併し今更の如く松陰の真正面を人柄が奇妙な

(7)

力を以て私に迫つて来た。一旦は師と仰いだ人でも、自己がひたむきに進んで、その師と見解を異にするや、道ちにこれを出つて——否文字通り敬服の如く棄て去つて、顧みない。罵詈雑言を吐きつけてさへ居る。このやうな一面から言へば自己に忠実な、他面から申せば社会性を欠くとさへ評しうる態度は、ゆくりなくも数年前に興味深く読み、うたれることが多かった河上肇博士の「自叙伝」に見られた同博士の生き方を想起せしめた。博士の筆によつて帝大時代の恩師松崎博士以下多くの人が傷けられると共に河上博士も又血まみれとなる。松陰は徳富蘇峰氏がいみじくも喝破した如く、天威の爆弾であつたが故に自己の眞の使命を果すには、自らも水端滅腐となり他をも粉碎せねばならなかつた。河上博士にも殆んど懸念らしいものは認められない。しかしやうなつて行かなければならぬ何物かであつたやうだ。

松陰を昔年の至らなさを持つとして非難する人にも一理はある。併し彼が長生したからとて渾然玉の如き人務者たりえたであらうか。甚だ疑はしい。只、代々の如き凡人として社会に生きて行く上には余程考へなければならぬものがあるのではなからうか。彼に曰く、鶴の真似する鶴水に洩れど。

歴史を創る人々

史学科四年 吉永昭一

千変万化、極りない現実の姿を、我々は生きた眼をもつて、まざまざと見せつけられてゐる。ともすればある力つために、その眞実な姿はおおいに隠れる。しかし何時もありのまゝの姿を証明してくれるのは、歴史であらう。私たちはその進むべき方向をしつかりと見極め、その海りのないものを推し進めなければならぬ。

この事は何時の時代も、共通した方法をもつて実践され、形こそ異なれど、容易に生きた現実から之を穿ぶことが出来る。

私はこの事を「古きをたずねて、新しきを知る」の語にあるように、中世(室町時代)よりの所謂一揆(一揆、百姓一揆、馬借一揆等)に求め、今に関連づけて考えられるのも一方法であらうと思う。

なぜ生きてゐる、生きんとする人間は、かゝる事をするか。其は社会の発展と生存競争の具体的な現れである。と見ることができよう。そして此は直ちに歴史を動かす本質的な原動力であらう。即ち歴史は日々の生活の中に形成され、社会構成員の最も多くの人々によつて推し進められてゐるのである。出来上つたもののみを見て云々することは、何等の社会的存在も感ぜぬ。

い人であろう、むしろ完成までの過程に大きな意義がある。そこに一人では成し得ない潜在力があり、夫が歴史を創造しているのである。今の社会を見ても、生活の考に裡々な事が展開され、そこに生きた新しい文化が生れ、成長しているのである。

歴史は刻々創造されていく。そこには限界は不必要である。

小学校社会科に於ける国史教育

史学科四年 山下 文彦

社会科が課せられてから既に六年目を迎えた今日、社会科は如何に歩んで来たか、戦前行われた国史教育は社会科が設置された結果、教師に、世の親達にどんな反響を与えたか、日本の如き長い歴史を持つ国が、僅々三百年足らずの歴史しか持たぬ米国から直輸入した社会科である時は、[「]国史設置論[」]の起るのも又不思議ではない。長い歴史や、伝統の前には個人力が如何に微力であるかによつても明かである。然らば社会科に於ける国史を如何に扱うべきか、

簡単に一例をあげると、一年生に於ては家の父母、祖父母について、いろいろと話をさく。更に四年生に

なれば自分の住む地域社会、或いは隣接の地域社会の史的変遷の研究調査、六年生に至れば日本の国史の概要を知ると云つた様に、各学年、各学期、各單元毎にその基礎的知識を段階を追つて授ける操心掛けねばならぬ。只慢然と地域社会の課題による單元の設定、取扱いのみに終止せず、各單元毎にその單元に於てはこれだけの基礎知識を授ける、この学年に於てはこれだけと云う様に、教師が目標をばつさりして置くことが必要である。六年生になつても「南ヶ原は北海道にあるスズランの名所」等の珍答案が出るのであつて、その責は児童側にあらずして全く教師側の皆さんの教育計画にあると云わねばならぬ。社会科に於ける批判もここから生ずるのである。修身科飯沼論もこの類である。

明治政府の暗殺奨励

九段の靖国神社には井伊大老を斬つた水戸の浪士一七人が併記されてある。そしてその浪士達はそれだけの栄典に浴してゐる。彼等のやつたことは国家を養つてやうなことでながら斯く恩典に浴してゐるのである。そう考へてくると目的が国家のことを慮つてやつたこととなら暗殺をしてもよい。吾等が奨励すべきだということになりそうだが、それで明治以後日本に暗殺が流行したものとみえる。昔のことは歴史上の單なる事実としてこれは宜しいという理解が通るとすれば今日は明日から視て過去に属するから今日に悪いということは明後日から視て或は善いとなるかも知れぬ。

277

会務報告

夏期休暇中、活動を休止してゐたが、第二学期に入り前回委員会の計画に基き、第二回例会を皮切りに、諸行事を繰りひろげた。

一〇月一六日(月) 第二回例会は、辻善之助先生をお招きして二二日に催すべく決定。直ちに案内状發送。

一〇月一八日(水) 学内不穩につき例会延期を各会員宛通知。

一〇月二四日(火) 例会二八日再開決定。再び案内状發送。
一〇月二八日(土) 第二回例会開催於嘉悦学園七番教室。

午後五時半——七時半

会務報告(題目)

会長挨拶

辻先生御講演「時代思想を超越するもの」(内容は別掲)

参会——藤井、竹内、丸山、岡藤教授及び学生三四名

一〇月三十一日(火) 第二回公開講演会準備委員会

午後五時——八時、於研究室

藤井、竹内、丸山、岡藤教授及び清水

鶴岡、安藤、窪田委員出席、主として

宣伝方法の検討。

一一月一八日(土)

第二回公開講演会開催

午後一時四〇分より於学生ホール

挨拶

教授 藤井基太郎

唐木五代の武人政治 兼任 岡藤吉之

中世村落に於ける神社の座

教授 丸山忠綱

西洋中世に於ける僧院の生活とその

文化活動(幻燈使用) 教授 竹内直良

折からの悪天候にも不拘、来聴者二百

名を越え盛會裡に六時終了(詳細別掲)

一一月一九日(日)

第二回史蹟調査案内状、各会員宛發送。

一一月二三日(水)

勤労感謝の日

第二回史蹟調査舉行。

金沢文庫見学

午前九時半品川駅集合、午後四時湘南

線金沢文庫駅解散。

藤井、竹内、丸山、岡藤教授及び学生

二八名、更に一般参加二名。

一二月一六日(土)

前回に続いて幻燈を使用して竹内教授

が西洋中世及びルネッサンスの美術に

ついて講義された。(主として新三年対象)

昭和二六年

二月三日(土)

会報第二輯発行準備委員会

午後三時半より、於研究室

第三編編輯事務は、周圓の事情から旧三年が主として之を執り、又原稿の一部を一般会員の募集することに決定

（卷目）

昭和三大耳度史学会總會並びに新會員歡迎會は四月三日（土曜）午後六時から開く予定である

本会以振替口座が設けられた

東京 五一七八番

から利用して載きたい

昭和十六年度に於ては会費を活版刷りにしたいと思つてゐるので会員諸兄の御助力を切に希望する

新制三耳丹治傳鐵君からワラ半紙一〇〇枚、史學会に寄贈があつた。感謝は堪えない。

以上附記する

(昭和26年2月15日現在)

收入の部		支出の部	
会費金普		第一回文壇調査	200.-
謝礼	1,500.-	参観謝礼91世	
卒業生	1,050.-	第二回例会	1,860.-
旧三年	5,600.-	通知状	860.-
新四年	3,150.-	謝礼	1,000.-
新三年	5,200.-	会報(第一巻)印刷代	2,100.-
学校ヨリ公南講義金補助	6,000.-	第二回公用講演会	7,089.-
		通知状	1,000.-
		印刷代	500.-
		ホスター	2,429.-
		会場扇板	650.-
		謝礼	1,500.-
		雑費	1,000.-
		第二回文壇調査	1,160.-
		講演謝礼	300.-
		接待 "	200.-
		茶業代	660.-
		雜費	200.-
		帳簿(一ト)	180.-
		封筒	20.-
	22,500.-		12,789.-

會計報告

附記

會費納入は殆ど予定の半額のみにすぎず、三月までに完全徴収の予定なり

(第五目)

(海國)

屋引残高 9.711.00

(13)

クラス便り

旧制学部卒業生 (渡辺生)

地軸がまわつて、校門を出てから一ヶ年は夢の間に過去の時間に繰り込まれようとしている。風の便りによると、夫々のポストに中堅となつて活潑な活動を展開しているとのこと、僅か一ヶ年足らずの短日月であるが、三ヶ年の学びやの生活が、もう物を言っている。で、何事につけ日頃、諸先生より与えられた賜多くと感謝の有難さが身に浸みて感ぜられる。移動の部としては、平出君が郷里新潟縣の燕町に帰り燕中学に奉返。中根君が本所工業高等学校に奉返。白井君が文京区第四中学に奉返。田辺君は元勤労校分校主任に奉返。高橋君が芝区 中学に奉返。吉田隆次君、水道橋の東洋高等商業に奉返。伊藤博君は杉並区中学に、三橋君葛飾区の 中学に夫々奉返。

慶事の部としては岡君、野田君、夫々スウィートホーム入りめでたしめでたし。

旧制三年

(橋岡生)

雪も解け、春を告ぐる鳥の鳴ずけを聞く今日此頃、我々は卒業の期の新く身に迫るを来々と感じる。思へば長くもあり、短くもある三年間であつた。

入学時を懐古するに如何なる宿命か、此処に相集まり共にたづさへて、今日最も把握の困難なる「史学」を研究し来つたのである。

この間幾多の脱走者を見たが、然しある時は固分寺に遊び、ある時は金沢に遊び日に日に親睦を新にしたが、又反面失敗もあり、先生にまで御迷惑をお掛け致した事もあり、その思い出は一生忘れ得ないであらう。夫此にせよ我々をして、今日あらしめたのは諸先生方並びに先輩諸兄の賜である事は勿論である。さて卒業の気新しく、クラスの意気天を突く今日、此処に教ずる事は、まことにしのびがたい。然し此が運命といふものであらう、我々はかかる意気を卒業後、持ちこたへ新しき世に再出発したい。

新制四年

(安藤生)

新制大学が発足してから第一回の史学科の学生として史学科の門を叩いた者は三八名であつた。しかしその後都合により卒業半にしてやめた者、その他の理由により、初志を曲げて他の道に進んだ者等で、結局は二一、二名の者が卒業予定者となつております。

大半の方が高師部出身者であり、所謂願願系であつた。しかし他校出身者であるからといって決してらみ合をしていた訳ではなく、全く意気投合、お互に助

けたり、助けられたり、和氣あはれいの裡に我が史學会の発展を望んで努力して来たのである。この点は筆者としても眞にクラスの方々には頭を下げたは感持で一杯です。

過ぎ去つた二ヶ年の学窓生活、額の汗を拭きながら講義を聴いた酷暑の夕べ、手をカチカマセながらノートを執つた酷暑の夕べ、想いでの数々は、今此の学園を去るにあたり俄に走馬燈の如く駆け廻つて来ます。去る二月一日の神楽坂の某料亭で、藤井、竹内、丸山の諸先生方と、クラスメートが相集い、酒食を共にしつゝ、談笑に興じた。一時は教室にては到底拜聴の出来なかつた名句名言を胸に、又は朋友相擁して自己の抱負を語り合つて時の過ぐるのも忘れて談笑に打ち興じた。一々は学窓生活の中の想出となつたことであらう。クラス便りを書くように言はれ、お引受けしたものの、以上のような拙文となつてしまい、皆様のお叱りを受けなければと内心ビクビクしながら摘筆します。

(二六、三、五日丁、A記)

新制三年

(藤宮生)

人間には弱味がある。つらい事があるとそこから逃避しようとする。この一つのあらわれではなからうか、昼間の仕事が終わつて「ホット」すると四時三〇

分、これから又自分の仕事が始まるのがなあ、と此を解放されたものだと、昨年一ヶ年と云う短い間に私は何回思つたかわからな。しかもこの様な事は、仕事に忙しくなればなる程、精神肉体的疲労の等比級数的に感じられて来る現象である。その様な時は私に良く私を反省してみた。こんな訳では無かつたはずだ、自分が好きでそして、どんな苦勞にも屈せぬ覚悟で入つたつもりなのに、……心の弱さに妥協してしまおうか？。なに「くそ」……繞けた、雨、風の日と、重い体を万年筆とノートに任す。鐘の音、何時しか私の体は、晝間の体にまして、何んの屈托も感じず、そして何んとも云へぬ心の暖かさ、と、樂しさとを感ぜざるを得ない。先程の体、今の私。これが同一なものであるうか、自分自身に一種の不思議な感をいだかずにはおられない。そのはずだ。

去年の一月頃だつたと思う、東大の辻善之助先生がお出になつて私達に講演をして下さつた。その時藤井先生が先生を御紹介の節に「学問を教えるに一週間前から準備なさるとのお話——」このお考えを持つて居られる先生方が法政の先生である事を……そして御老体でありながら私達の為にな分おそくまで、あの熱私達学生は非常に幸福なる事を痛感する。それに加えて同志の和氣あはれいとした姿、時代の流れを客観視し得る。……此處歴史を学ぶ姿なる事を……

卒業論文題目

旧制第一回卒業論文題目

中世に於ける庶民生活（特に鎌倉時代を中心として）

渡邊 省三

近世封建社会に於ける街道と宿駅について

平出 匡秀

奈良朝初期に於ける農民抗争について

星野 重藏

国家生成様相綴へ邪馬台国の位置についての考察を

中根 好

日本の文化史上に於ける基督教と社会主義思想（大津

事件までのわが国社会主義思想及運動に与えた基督教

教の影響）

白井 慎

唐代の均田制（農業税制）と荘園の成立について

金子 吳市

王くしげを通じて観たる百姓一揆（本居宣長の百姓

一揆観）

近世牢人史（江戸幕府の武断政治より文治主義政治

に推移する近の牢人活動について）

平山 平

荘園発生の基礎的過程について

中世農民支配と農民反抗運動に就いて

中溝 志

足利学校について（其の学風を中心として）

宮川 敏造

中世に於ける農民と武士発生について

田邊 和彦

日本封建社会前期に於ける農民抗争について

見玉 輝彦

中世末期東国に於ける地侍の性格とその行動

石渡 隆之

江戸時代に於ける東海道の交通制度について

関 秀作

埴田岡発を中心として観た埴田制崩壊から大土地所

有化過程の考察（埴田より荘園への変質過程に關す

る研究）

鈴木 宏

幕末異国船処置令の研究（特に文化、文政、天保時

代を中心として）

内田 富夫

中国人の見たる日本観

日本水運史に於ける近世的形体の問題（琵琶湖水運

の厂史地理学的考察）

水谷 文吉

江戸時代に於ける飛脚制度に就いて

明代に於ける北元還旅の活動

日本初期切支丹史の一考察（特に切支丹大名大村純

忠の研究）

久下 司

市川 茂雄

芥川 龍男

日本都市発達史上に於ける近世城下町の

成立と盛衰

大森 加信壽

吉野朝時代に於ける儒學について
大化改新について

武田 文夫
安西 幸男

新井白石に於ける史學と政治

大森 芳衛

家人の沿革

添谷 英男

京都七口率分所について

高橋 道夫

中世莊園に於ける公式二元支配の問題（地頭領家の紛争に於ける和与の意義）

田中 輝雄

夢之代に於ける財政経済論について（研究）（近世町人の経済思想の一面）

角田 五男

検地より見たる津輕藩の農民政策（武田源左エ門検地、秘書をめぐりて）

星野 武一

百姓「検」の非革命性

伊藤 公一郎

宇下人言より見たる寛政前後の社会経済の様相（足橋の政策を通して）

和田 和夫

日本古代家族の構成について

大島 宏郎

元禄宝永の貨幣改鑄について

新田 實二

近世再興機業の史的発展過程について

野田 茂

江戸時代の町人について

吉田 隆次

江戸幕府創成期に於ける幕府の経済政策について（特に家康を中心として）

中村 利夫

貞永式目を論ず

伊藤 博

女帯考（主として徳川時代）

村上 仁

切支丹末朝記

川口 友彦

近世の浪人に就いて

三倉 博義

旧制第二回卒業論文題目

中世に於ける商人の意義

鶴岡 英雄

一向一揆の研究

金子 昭武

徳川時代に於ける社会政策（特に農民の離村問題を中心として）

鈴木 英市

江戸時代に於ける駅伝の制度

豊岡 晃

新井白石に於ける外国貿易不利論について

椎名 詩亮

徳川時代に於ける大井川渡渉に対する一考察

渡辺 善四郎

遣魯留学生始末の研究

佐藤 二郎

東亜先史文化史

田中 三雄

江戸時代に於ける女性の地位（特に離婚を中心として）

並木 正雄

助郷制度について

大坪 清

江戸時代に於ける農民社会の構成と農民一揆

原 勇男

室町時代社会動乱の底にありしもの

小沢 慶二

三浦半島の先史時代の研究

村松 誠

近世に於ける新田開発の意義

村上 直

(17)

江戸の成立（特に玉川上水の起源についての考察）

沢中 尚治

室町時代の土一揆

西山 秀一

村明細帳を通して見た江戸時代村落の研究

永沢 光義

寺子屋の研究

石出 謙

元禄時代の各種物価について（特に「ケンベル」江戸

参府紀行を中心として）

平田 幸平

明治初期に於ける士族の女性（特に豊岡製絲場工女

の考察）

加藤 直子

唐代の科挙について

湯浅 一二

近世に於ける地主に就いて（秩父地方の場合）

松丸 繁雄

荘園制度の崩壊と土一揆について

馬場 弘二

封建時代前期末に於ける農民の抬頭について（特に

伊勢に於ける本願寺の教勢と長崎一揆を中心として）

柴田 実

水戸藩の常平倉について

町人の研究

玉崎 保一

荘園制度の変質過程について

石塚 義一郎

近世初期政権の農民策序説

鈴木 幸十郎

中世に於ける産業の発達と貨幣流通

清水 賢蔵

津元に於ける封建的浦支配

目黒 正男

郷土史研究（千葉縣夷隅郡大多喜町を中心として）

高山 茂

江戸初期に於ける庶民教育

長田 早苗

ロシア絶対主義の変則的資本主義への発展と社会変

石川 政雄

革の形成

木村 昇

南西諸島と日本との歴史的関係

松元 新正

近世封建社会研究に就いて（特に封建的様相として

石井 昭

の性格、体系、生活及思想について）

日暮 雄一

江戸時代の交通と飛脚の衰退

新制第一回卒業論文題目

日本近世思想の萌芽（特に国学の歴史的意義）

鈴木 雅文

商業を主流として中世都市の発展過程

吉永 昭一

本居宣長翁の宗教観について

大西 郷

江戸時代庶民層に於ける主従関係について

黒崎 菊江

殖産図書の研究本論

村井 嵩雄

西洋中世に於けるフランス教団の発生とその歴史

色目 善一郎

的意義

岡山 咲子

徳川時代の百姓一揆

岡山 咲子

イスラエル文化史上に於ける予言者に関する研究

横山 弘三

五フ・ルーヒに於ける封建關係の政治史、社会史
的考察

武家法制に見ゆる家族制度

王義之の研究

近世文化の黎明

中世武家社会の構造について

唐代に於ける学校制度

江戸時代の日本に於ける農村社会の研究（特に武蔵
国羽村を中心として）

中世農民一揆と階級性について

江戸時代の社会思想に就いて

東洋科学思想史上に於ける漢方医学の地位（特に科
学制度に及ぼしたる影響）

明治維新の農村に於ける土地所有について

出雲風土記の民俗学的考察

山口 信夫

目黒 俊二

樋口 秀雄

酒井 ツヤ

派山 晋

野口 正夫

山下 文彦

今村 高明

大久保 謙二

上條 千秋

安藤 武夫

池田 昭

編集後記

昭和二五年度決算会の活動を振り返ると、例會を二回、公開講演會を二回、決算調査を二回実施した。思えば忙しの中からも此等の活動ができた事は偏に指導に當つていられる教授諸師の各位並びに会員諸君の御助力の賜である事を衷心より有難く思つてゐる。今後共、指導の先生方を中心として卒業生も在學生もつとて一丸となつて益々此の會が順調に発展して行くように心から祈つてやまない。

早春三月、今大池の恵と暖かい太陽の熱によつて草木皆新らしい芽を出しつゝある。我が決算會も亦会員諸兄の熱情によつて新たななる、そして力強い芽を出してゐるのである。

昭和二六年度は此の會報も看板刷りになるであろう。今後の発展を期待してやまない。

会報第三号の発行は諸兄の絶大な御援助を得たにも拘らず編輯者の怠慢でちがいのため遅れて御迷惑をおかけ致したこととを茲に紙面を借りて陳くお詫びする。

表紙の文字は第一号と同様会長藤井先生の筆、カッとは渡辺画伯の作、前号より一歩進め会員各位から原稿を募り「随想」として掲げた。学年末試験のまじりつた時期であつたせいかな産物の姿勢しかなかつた事は残念であつた。おさなりの編輯になつて申訳ないが第三号からはもつと立派なものとしたいと思つてゐる。

新に昭和二六年度は多士者の新会員を迎えて喜びに堪えない。

尚、本學では今まで旧制大学院があつたが此度修士課程の新制大学院がごき藤井教授の講堂が設けられたが昭和二七年度には史學専攻として独立の運びとなる由で史學會として心強い次第である。

水筆になつて申訳ないが丸山教授は去る三月中旬新宿区若宮町二五に新居を構えられ四月上旬御里長野市に於て芽出芽華燭の典を挙げられ御由、会員一同お慶び申上げる次第である。内助を得て益々學界に雄飛せられん事を祈つてやまない。

会員諸兄の御発展と御健康とを祈つて敬言する

(編輯委員)